

1%を芸術のために



随 筆

福 井 希 一*

Percent for art program

Key Words : one percent, art, policy, program

科学と芸術の出会い

もう十年以上前の話になるが、友人からメールがあり、日本画家であった友人の父君の白寿を祝う展覧会が出身地である岡山の山陽新聞社にて開催された事、展覧会は盛況の内に終わったが、それを見届け安心したかのように元気であった父君は展覧会の終了とほぼ同時に亡くなった事、故人の希望として展覧した作品の一部でも非常勤講師として務めていた岡山大学に寄贈したい希望が有る事、などを知った。友人の父君は日本で最大の芸術家集団である日展の会友で同郷の葉上照澄大阿闍梨が比叡山で行じた千日回峰行の始めから終りの断食行までを描いた絵巻物が延暦寺に納められている。

偶々ではあるがその当時、私は岡山大工学部でバイオテクノロジー分野の非常勤講師を兼任しており、この件を知り合いの教授に尋ねてみた。返事は直ぐにあり、岡山大学としては工学部では無く大学として受け入れたいこと、通常の寄贈として取り扱う事、作品を購入するのは難しい事、などの意向が示されたが、これらは寄贈を希望する遺族側には問題ないものであった。

こうして岡山県内の風景を描いた作品などが本部棟の学長・理事室廊下前などに展示され現在に至っている。その後の様子を聞いた私に工学部の友人は、理事の一人から「考え事がある時、しばらく作品の前に立って見ていると気分が落ち着く」と聞いたよ、と教えてくれた。作品を見た全員がその様な感慨を持つ訳では無いだろうが優れた芸術作品の面目躍如たるものが感じられて嬉しくなった。岡山大学はその後、画伯の御遺族を招いて学長出席のもとで作品の贈呈式を行ない、心からの謝意を表した。



図1. 「浄韻」戸田英二 (岡山大学)



* Kiichi FUKUI

1951年1月生まれ

京都大学農学部、大学院農学研究科(前・後期課程)、農林省農業技術研究所(研究員)、農水省農業生物資源研究所(主任研究官)、農水省北陸農業試験場育種工学研究室(室長)、大阪大学大学院工学研究科(教授)、東京大学大学院工学系研究科(招聘教授)などを経て、現在大阪大学薬学研究科(特任教授)農学博士 専門/染色体・ゲノム科学

E-mail : fukui-k@phs.osaka-u.ac.jp

連絡先 : Art Meets People

〒602-8071 京都市上京区仕丁町329

電話・ファックス 075-201-3713

<http://www.artmeetspeoplejapan.com>email: amp@artmeetspeoplejapan.com

Art Meets People (AMP) の設立と活動

大学に芸術作品の展覧が必要かと言う疑問には、寄贈された日本画が岡山大学では誰でもが通る学舎内の通路に展覧され教員も学生にも喜ばれているという経験から容易に答える事が出来る。

またケンブリッジ大学に留学していた際には大学内の集会所などに所狭しと飾り付けられた作品の数々に息を飲んだ事もあった。歴史的には新しい、ダーウィンの生家をカレッジに改装した大学院生のためのダーウィンカレッジの談話室には、「これは

ダーウィン自身のお気に入りの写真です」との簡単な説明書きが壁に掛ったダーウィンの小さな白黒写真に添えてあった。重厚な油絵の作品でなくとも、現在の生命科学の発展の礎を築いた研究者といつでも会う事が出来、エールを貰っている様な感慨を抱かせた。日本の研究者も、勿論行っている研究は世界に伍するものであって欲しいし、またその為にこそ理系の大学でも研究を進める機能と併せて研究に疲れた時などに心安らぎ、やがて再び立ち上がり、勇躍新たな研究を開始するような空間が大学にはあって欲しいと思った。

そして話し合いを重ねる中で、芸術作品の寄贈活動に理解を示す有力な日展作家や各美術団体の作家の協力も得て、一般社団法人 Art Meets People (AMP) が2013年1月に結成される運びとなった。目的は作家が生み出す魂の塊である様々な作品を、作家のご理解とご厚意により教育施設に無償で寄贈頂く上での橋渡しをする事とした。また設置に関わる必要不可欠な諸経費、例えば額装費や運搬固定費などについては大学ごとに受け入れられる条件でご負担頂き現在に至っている。



図2. 「花神」堀内晴美 (大阪大学)

AMPでは美術品の寄贈先を大学などの教育機関としている。それは振り返ってみると人生で最も多感な時期に優れた芸術作品からの励ましのエールを受け止めてもらいたいと願っているから、そして優れた芸術作品はその場の空気を一変させる力を持っているからである。歴史的に見てもミケランジェロは市庁舎広場にダビデ像を建立し、誇り高いフィレンツェ市民の団結を促した。ダ・ヴィンチはサンタマリア・デル・グラッツェに最後の晩餐を描き、聖堂をこの上なく神聖な場所にならしめた。またわが

国では仏師・定朝の彫像は阿弥陀浄土の慈しみを実感として多くの人々の心に染み渡らせ、狩野永徳は信長、秀吉らの世俗の権力を芸術の力で荘厳の域にまで高めたのである。



図3. 「画室ものを描く」柴田耕 (大阪大学)

AMPを介した寄贈先は現在京大、阪大、立命館大、関西大などの大学が主たるものであり、既に100点を超える日本画、油彩画、彫刻、陶、染色、工芸、漆芸、織などの多岐にわたる分野の芸術作品を寄贈している。いくつか例を挙げると図3および図4は改装なった阪大中之島キャンパス(柴田耕、画室ものを描く)、および関西大千里東体育館エントランス(谷口淳一、まほろばへの道)に寄贈された例である。私見ではあるが、然るべき作品が置かれて居ない場合ではその空間は空気の抜けたゴム風船のように、張り詰めた「気合」が感じられない。一方、然るべき作品の置かれた場合はその空間は偶然に古くからの友人に出会った様な暖かい充足感で満たされるのである。

振り返ってみるといずれの国や地域においても、人類が未だ曙の時代の遺跡から発掘される石器や玉、土器などの完璧な美しい形象、そのために捧げられ



図4. ブロンズ彫刻「まほろばへの道」谷口淳一 (関西大学)

たであろう膨大な時間と労力を想うとき、芸術も科学と並んで人類の普遍的、原初的かつ根源的な精神活動であり、人間を人間たらしめる本来の属性であることが確信できるのである。

ガン病棟での学び

2010年6月、私は仕事の関係でアイオワ州立大学のガンセンターに出張していた。センターの建物は威圧的ではなく好感が持てた。相手の教授との仕事の打ち合わせも順調に進んだ。関連事項の打ち合わせが終了した後、教授が「送りますよ」と言ってここでの研究の概要を説明しながら正面玄関へと案内をしてくれた。1階近くになると患者や付き添いの方などで混雑していたので、送って頂いて幸いだった。またそれぞれの部屋のコーナーや壁面などにその場にマッチした絵画などの芸術作品が展示しており、ガンに罹り余命宣告を受けた患者にとって大きな心の慰めとなるのではないかと思われた。

ただ日本でも病棟などの廊下に病気を治してもらった患者が油彩画や水彩画を寄贈して感謝の意を表すのはよくある事である。そう思い、「Yes」という回答を半ば予期しつつ教授に質問をした。「これらの美術作品は患者からの贈り物ですか？」答えは思いもよらない「No」であった。私が不思議そうな顔をしたことを見抜いた教授はわが意を得たりとでも言いたげに話し始めた。「いいえ、これらの芸術品はこの建物が公共建築物である事から建築費の1パーセントをこの建築物に関連する芸術のために支出しなければならないという法律の下での購入、そして展示されているものです。そうでなければこれらの芸術品を買いそろえる事は困難だったでしょう。」

成る程、その様な法律が有ったのかと目から鱗の

想いがした。調べてみると欧米では20世紀中ごろから多くの都市で実施されている事が分かった。例えばニューヨーク市では市の所有するすべての公共建築で建築費の最初の二千万ドルの内最低1%を、二千万ドルを超える部分については0.5%以上を芸術作品の購入に充てる様、法制化されており、欧米では当たり前の事として定着が進んでいると言う。一方、日本では「文化の1%システム」として1980年頃からいくつかの自治体で期間限定の事業として実施された例は有るが、諸外国のように法制化するには至っていないのが現状である。

従って次に来たるべきシステムとしては寄贈される作品は「正当に評価されたものである事」が先ず重要である。そしてそれらの客観的な評価に応じて「正当な対価が作品に対して支払われたものである事」、これら2点が必要かと考えられる。AMPはいずれ「正当に評価され対価が支払われた作品」が大学や公共建築物の壁面や空間を飾る時代が来ることと考えている。私たちの現在の活動は限られたものではあるが、芸術作品のもつ価値の再評価に大きく貢献するものと考えている。

あとがき

以上述べて来たように、AMPは「芸術の力」を信じ、「芸術の力」を通じて、結果として日本のソフトパワーの質的向上に貢献するものと考えている。私たちは現在の日本が「安全で清潔そして効率的な国」という20世紀末に社会実装された直接的なものから、「芸術の力」をプースターとして、「常に心に余裕が持て、自然に対する人間らしい感受性と他人への思いやり、そして元気が出て、創意が湧く国」になる事を願っている。



図5. 「プラスチック・ファンタジー」 田村研一